

---

# MOON-4 夜叉 4 <26>

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 <26>

### 【Zコード】

N2767N

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

遂に和人と巡り会えた裕希。そしてつかの間の安らぎが訪れる。  
そして朝子にも・・・。

MOONシリーズ 夜叉4 最終章 第2話です。

1・月夜(がつや) - 2 (前書き)

「お月夜をお楽しみください。」

# 1・月夜（がつや） - 2

「随分、背が伸びたな、裕希。」

その和人の言葉に、ブラックのキリマンをリビングのソファで飲みながら、和人のTシャツを借りた裕希が答える。

「育ち盛りだから。」

裕希はミルク入りのアイス・コーヒーを飲みながら答えた。「和人は相変わらずだね。・・・・・ってか、俺和人と記憶を共有してるみたいなんだ。」

「そう。」

「だから、夜叉の言つた通り、和人の声を頼りにここへ来れたんだ。」

「裕希くんは強くなつたよ、和人さん。」

傍らの早坂が、「桜相手に対等に鬪つたんだから。」

そして、「不破和人さん・・・また、会えるとは思つていなかつたよ。」

そんな早坂の言葉に、和人は微笑を浮かべるだけだつた。  
見る者全てを魅了する、その微笑。

「アップル・パイが焼けたわよ。」

カウンター・キッチンの中から朝子が声をかける。「一番、大きいの食べたい人！」

「はーい！」

裕希は元気よく、手を上げた。「朝子さんの手料理なんて久しづりだよ！ねえ、和人も早坂さんも夜叉も手を上げなよ！本当に美味しいんだから。」

と、言うとテーブルに身を乗り出し、強引に、

「こらつ、裕希くん！」

「裕希。」

手を掴み上げさせた。

「アップル・パイなど。」

夜叉がぼそりと呟く。「平安の都にはなかつたぞえ。」

「ええ！じや、夜叉にはいっぱい食べてもらわなきや、ね、和人。」

「そうだね。」

和人はくすくすと笑い、「朝子、夜叉のを一番大きく切つてくれ。」

「はーい」

朝子が答え、夜叉は和人を横目で睨んだ。

「若。冗談にも程があるぞえ。」

「そう？」

和人は平然と答え、席を立ち、「朝子。手伝うよ。」  
キッチンの方へ向かつて行つた。

「ねえ。」

裕希は小さな声と手ぶりで夜叉と早坂を呼び、「ちょっと2人だけにしておこうよ、和人と朝子さん。」

そして、「早坂さんの言う、謎解きの話しへバルコニーにしよう。」

早坂はいち早く、それを察し、

「そうだね、裕希くん。」

それとは対照的に、

「どうしてじや？ 裕希。」

と、夜叉。

「夜叉。」

裕希は夜叉の耳元で、「和人と朝子さん、両想いなんだ。だから、ちょっとだけ2人だけにしようよ。」

「そうかえ。」

夜叉は口元に笑みを浮かべ、「それなら」  
キッチンへ声をかけた。

「少し早坂殿と裕希とで外の空氣を吸つてくる故、作戦會議はバ

ルコニーで。」

「おい、夜叉！」

和人が慌てて振り返る。「ここでいいじゃないか。」

「まづいのだよ、外の空氣に触れて食べた方が美味しいだろ?」

「そうそう！」

裕希は席を立ち、「じゃ、朝子さん待ってるからね！」

「裕希くん！」

朝子が顔を赤くして少年の名を呼ぶ。

3人は手を振り、バルコニーに席を移した。

カウンター・キッチン内に残された和人と朝子。

「あいつら、何考てるんだ。」

和人は不機嫌そうに言った。

「いいじやない、別に。」

逆に朝子は上機嫌だった。「和人も食べてよ、朝子さん特製のア

ップル・パイ。ジンジャー入り。」

「御言葉だけ頂戴しとく・・・」

「駄 - - - 目！はい、味見。」

と、その一欠けらを和人の口元にフォークで差し出す。

「・・・

仕方なく目を閉じて、口を開ける和人。

「ねえ、和人。」

そんな彼に朝子は言った。「あの言葉本当?」

アップル・パイの欠片を食べながら、

「何の言葉?」

「忘れたの?」

少し拗ねたように、朝子が言つ。

和人は目を開いた。

そして、

「朝子も味見してみる?アップル・パイ。」

「和人。」

彼は彼女の長い髪に手をかけ、抱き寄せた。

「美味しいよ、アップル・パイ。」

そして、2人の唇が重なった。

やあつて、朝子が呟いた。

「もう、何処へも行かないでね。」

「約束するよ、朝子。」

心配そうな朝子を、和人は両腕で抱きしめた。

「20年前」

朝子が思い出した風に、「九桜から私を助けてくれたのが貴方でよかつた。もし、九桜が私の血を奪つていたら今、私はこんなにやなかつたと思う。『闇』に染まつていたと思う……」

「そう。」

「それからずつと貴方に育てられて、『今の私』がいるの。『闇』と『光』の狭間に立つていて、裕希くんと同じように貴方がいるから『闇』に染まらない。」

「そうだね。」

和人は朝子を抱きしめる両腕に力を込めた。

「ずっとそのままでいてくれ、朝子。」

「和人がいる限り……だって、初恋の人とやつと両想いになつたんだもの。」

「そうなの？」

「鈍いなあ。」

朝子は和人の両腕から身を離し、右手の中指で彼の額をこつん、とつつく。「本当、和人つて鈍感なんだから。」

「悪かったね。」

和人は苦笑して言つた。「でも、もう一人にはさせないから。秀も桜から奪い返してみせる。」

「和人……」

「ほら、また不安そうな顔をする。」

今度は和人が朝子の額をこづく。「大丈夫。夜叉もついてる。」

その時、

「ねえ！朝子さん、和人！」

バルコニーから裕希の元気な声が聞こえた。

「アップル・パイまだ？」

「はいはい。」

朝子は和人に笑みを浮かべ、アップル・パイを切り始めた。

1・月夜(がつや) - 2 (後書き)

また、次回にお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2767n/>

---

MOON-4 夜叉 4 <26>

2010年10月10日12時58分発行